

《インタビュー記録》

歴史教育体験を聞く

小林新三先生

日時：2010年7月29日

場所：新潟県新潟市西蒲区

聞き手：茨木智志・鈴木正弘

はじめに

「歴史教育体験を聞く」の目的は、歴史教育に携わってきた先生がたの歴史教育の体験、すなわち自分が受けてきた歴史教育、そして自分が行なってきた歴史教育の話を中心として、さまざまな経験や思いをインタビューの形で聞き取り、その記録を活字にすることで、歴史教師の共有の財産とすることにある。

今回は、小林新三（こばやし しんぞう）先生がインタビューをお引き受けくださった。小林先生は1924年のお生まれで、戦争中の学徒出陣、戦後の復員を経て、東洋史研究に携わりながら、長く都立高校で歴史の授業を担当された。その後の私立中学高校での勤務の後、故郷の新潟県に戻られてからは、郷土史研究でも活躍されている。

以下は、小林先生のインタビューの記録である。

1. 新潟県立巻中学校への入学

— 本日は、よろしく願いいたします。はじめに、生い立ちから、中学生の頃のお話をお聞かせ下さい。

私は、大正13（1924）年2月13日に、今、住んでいます新潟市西蒲区漆山（旧・西蒲原郡巻町漆山¹）で生まれました。

昭和11（1936）年3月に漆山尋常高等小学校²の尋常科を卒業して、4月に新潟県立巻中学校³（旧制）に入学しました。田舎の中学ですから、それほど難しい試験ではなかったと思いますが、A組とB組の100名入学のところ、受験では7名が落ちたと、後から聞きました。受験番号が1番で、ぐずぐずしていたら、怒鳴りつけられたのを

¹ 西蒲原郡漆山村は1955年に合併して巻町漆山となり、さらに2005年に新潟市西蒲区漆山となった。

² 漆山尋常高等小学校：現・新潟市立漆山小学校（新潟市西蒲区漆山）。戦前の小学校は、6年制の尋常科と、尋常科の卒業生が入学する2年制の高等科が併設されているのが普通であった。

³ 新潟県立巻中学校：現・新潟県立巻高等学校（新潟市西蒲区巻乙）。なお、旧制中学校は5年制であった。

覚えています。

当時の不景気が関連しまして、5年の最後まで進んだのが、82名であったとも、後から聞きました。そういう時代でした。

— 小林先生は、後に東洋史を専攻されますが、中学生の頃から、歴史に興味をお持ちだったのでしょうか。

私は歴史に限らず、全般的に好奇心がありました。東洋史の先生は、板書のきれいな東京高等師範学校⁴を出られたかたでした。西洋史は、東京帝国大学⁵哲学科の倫理を出られた久保田隆円先生に教わりました。久保田先生は、後に新潟県立の柏崎高校（柏崎市）、高田高校（上越市）の校長になりました。お二人の先生には、ずいぶん、かわいがって頂きました。巻中学には、すごい先生がたが、たくさんおられました。私は、英語のリーダーも、代数もよかったのですが、ただ、作文と幾何、工作は、全くだめでした。

— その後、師範学校に進まれたと伺いましたが、その間の経緯は、どのようなものでしたのでしょうか。

巻中学の2年生を修了した後に、新潟師範学校⁶の第一部⁷に入りました。師範学校へは、ふつうは、小学校の高等科を出て、入学します。私は、どういうわけか、入れられてしまいました。地元の巻中学にいれば、家から通うこともできて、お金もかからず、いいはずなのですが。

察するところ、当時あった、軍隊の短期現役制度のためかと思います。短期現役制度というのは、師範学校を出た者は、小学校の先生になるのですが、軍隊に半年ほど行って、伍長⁸になれるというものでした。それで兵役が終わるという制度でした⁹。そのために、自分は、入れられたのではないかと思います。

⁴ 東京高等師範学校：高等師範学校は、中等段階の学校教員養成のための4年制の高等教育機関。男子が東京と広島、女子が東京と奈良にあった。戦後に、東京高等師範学校は、東京文理科大学などととも、東京教育大学となり、現在は筑波大学（茨城県つくば市など）になっている。現在の東京都文京区にあった。

⁵ 東京帝国大学：現・東京大学（東京都文京区など）。

⁶ 新潟師範学校：新潟県新潟師範学校（新潟市旭町通。現・新潟市中央区旭町通）。1943年に新潟県長岡女子師範学校と統合して、官立新潟第一師範学校男子部となり、戦後の新学制のもとで、新潟大学教育学部（新潟市西区五十嵐）となった。

⁷ 師範学校第一部：師範学校は、戦前の初等教員養成のための教育機関。当時の師範学校は、高等小学校卒業程度の者が入学する5年制の本科第一部、そして中学校・高等女学校卒業程度の者が入学する2年制の本科第二部、さらに師範学校卒業者を対象とした1年制の専攻科があった。

⁸ 伍長：旧日本陸軍の下士官の階級。伍長、軍曹、曹長と進級した。

⁹ 通常の場合、兵役の期間は、陸軍で2年、海軍で3年であった。

巻中学の同級生では、2年修了で、新潟師範学校に私を含めて3名、そして、高田師範学校¹⁰に1名が進みました。入学試験は、英数国の他に、理科や社会に関するものもあったと思います。それから、目の検査や手の運動などもありました。

2. 新潟師範学校での生活

— 新潟師範学校でのことについて、お聞かせ下さい。

それで、昭和13(1938)年4月に、新潟師範学校に入学しました。ただし、短期現役制度は、昭和14(1939)年4月から、なくなりました。

第一部の同級生は、たしか40名でした。尋常高等小学校の高等科2年を卒業して入ったのが、32~33名でした。今でいう一浪をして、入った者もいました。また、3年制の乙種中学校から入った者も、2~3名いました。私のように、中学校2年修了で、入った者も5名いました。それから満洲¹¹から来た張景新という同級の留学生もいました。

師範学校は、全寮制でした。私が室長をしていたとき、3年下に、張鐵鵬^{てつほう}という吉林(中国)から来た留学生がいて、世話したこともありました。私は、5年生であった昭和17(1942)年の夏休みまでは、寮にいました。その後は、受験勉強もあり、下宿しました。

— 当時の旧制中学校と師範学校というのは、どのような違いがあるのでしょうか。また、当時の師範学校での生活をお聞かせ下さい。

旧制中学の優秀な生徒は、新潟などの旧制高校¹²に入って、そこから、東京や東北の帝国大学に行きます。また、北海道帝国大学予科などへも行きました。一方、師範学校の、特に第一部は、当時は農村の中小地主程度の子弟、なかでも長男が多かったです。大地主の子弟は、旧制高校に行きますが、私たちは、お金がないので行けません。そういう関係はありました。ふつうの中農程度の地主の子弟は、加茂農林学校¹³などに進みました。あまりお金がない者が、師範学校に行きました。師範学校は、月謝が不要でした。

¹⁰ 高田師範学校：新潟県高田師範学校（新潟県高田市西城町。現・上越市西城町）。1943年に官立新潟第二師範学校となり、戦後の新学制のもとで、新潟大学教育学部高田分校となった（1982年に新潟大学の五十嵐キャンパスに統合された）。跡地には、上越教育大学附属小学校と中学校がある。

¹¹ 満洲：中国東北部。当時は、日本により満洲帝国が存在していた。

¹² 旧制高校：3年制の男子の高等教育機関。旧制高校は、地域のエリート養成の役割を果たした存在であった。旧制新潟高校は、戦後の新学制において新潟大学となった。

¹³ 新潟県立加茂農林学校：現在は、新潟県立加茂農林高校（新潟県加茂市）。

ただし、私は剣道をやっていたので、人並み以上に、お金はかかりました。昭和17(1942)年5月に、三段になりました。橿原神宮¹⁴大会という、師範学校の剣道の全国大会に出場しました。当時は、受験勉強をしていましたので、勉強と剣道の両立は、とてもきつく、正直に言うと、剣道は迷惑でした。今の天理大学¹⁵近くの天理教宿泊所に泊って出場しましたが、そのときは千葉師範学校¹⁶が優勝しました。

— 師範学校での授業は、いかがでしたか。

地理の先生は、東京文理科大学を出られた山形出身の長谷部勇治¹⁷先生でした。長谷部先生は、昭和20(1945)年5月21日に、名古屋の住友軽金属工場での学徒動員のときに、殉職されました。空襲を受けて、本科1年生37名の生徒をみな、防空壕に避難させた後に、最後までいらした長谷部先生が、焼夷弾の直撃を受けたと聞きました。私は、当時の新聞記事を取っておいて、山形市に先生のお参りにも行きました。担任や剣道部の副顧問としても、私が一番お世話になった先生でした。

日本史の先生は、広島文理科大学を出られた宮地茂¹⁸先生でした。授業は、黒板勝美¹⁹の分厚い本を教壇に出して、これを読むだけというものでした。生徒が分かるうが、分かるまいが、関係のない授業でしたが、私には、分かったような気がしました。宮地先生は、家に帰ると受験勉強をしていたのだと思います。そして、高文(高等文官試験²⁰)を通過して、昭和17(1942)年でしたか、秋田に行かれ、その後、文部省に入り、局長を二つ務められました。大学学術局長のときに、東京大学の紛争事件²¹があつて、東大を吹っ飛ばせと主張した有名な先生です。

私が、後に秀明学園にいたときに(後述)、文部省に行きますと、宮地先生は、「おお、小林か」と、私のことを覚えていて下さいました。先生に、「授業では、黒板勝美先生の、こんな厚い本を読んでおられましたね」と言いましたら、「そこまで見ておったか」と言われました。宮地先生には、いろいろと助けられました。宮地先生の代わりには、同じく広島文理科大学で日本史を専攻された、小村弑²²先生がいらっしやい

¹⁴ 橿原神宮は、神武天皇を祀るために、官幣大社として1890年に建てられた神社(奈良県橿原市)。

¹⁵ 天理大学(奈良県天理市)は、当時は天理外国語専門学校であつた。近くに天理教の信者が宿泊する多くの宿泊所があつた。

¹⁶ 千葉師範学校：現在は、千葉大学教育学部(千葉市稲毛区)。

¹⁷ 長谷部勇治：1913～1945年、地理学専攻。

¹⁸ 宮地茂：1914～2005年、日本史専攻。

¹⁹ 黒板勝美：1874～1946年、日本史専攻。

²⁰ 高等文官試験：戦前において高等官である文官に任用される資格試験。高級官僚の登竜門であつた。

²¹ 東大紛争：1968～69年の東京大学で展開された学生による紛争。キャンパス内の安田講堂をめぐる学生と機動隊の攻防で知られ、多くの大学に波及した。文部省により1969年の東京大学の入学試験は中止された。東大闘争とも呼ばれる。

²² 小村弑：1918年生まれ、日本史専攻。

ました。

- 東京高等師範学校の地理歴史（文科第四部）に進まれたのは、師範学校で歴史に興味を持たれたからでしょうか

かならずしも、そうとは言えません。先ほども言いましたように、師範学校の5年生のときは、夏休みを過ぎたころから寮を出て、下宿して受験勉強に頑張りました。ここまで来た以上、東京に出て、頑張りたいという気持ちがありました。それから、この当時に、新潟師範学校附属国民学校²³の女性の先生が、文化行政をつかさどる教育の司政官になり、インドネシアだったかに行つたと聞きました。司政官とは戦争中の占領地に行って働く文官で、中尉か、大尉かの相当官でした。そういう話を聞いて、他にもいろいろと興味はありましたが、地理歴史がいいなと考えました。これが事実です。

- 戦争中の師範学校の雰囲気は、どのようなものでしたでしょうか。

ひとつには、綴方事件²⁴などがありました。左翼が抑えられたり、その後も、いろいろなことがあつたりしました。師範学校の大先輩の遠藤先生は、これに引っかけられて、とても気の毒でした。教わつた先生にも、関わつたかたが、おられました。そういうことは、生徒としても分かつていました。

それから、橋田邦彦²⁵文相のときの昭和18（1943）年1月に、新潟師範学校は、新潟県立でしたが、官立（国立）に移管されました²⁶。何のことはない。師範学校は、ふつうの専門学校（旧制）と同じになり、繰り上げ卒業させて、昭和18（1943）年10

²³ 新潟師範学校附属国民学校：現・新潟大学教育学部附属新潟小学校（新潟市中央区旭町通）。

²⁴ 生活綴方は、1920年代から始まる、国語の綴方（作文）の教育を通じて、子どもの生活の現実の中から、子どもの人間形成をはかる教育実践であり、教育運動。戦中に弾圧を受けたが、戦後に復興し、継続された。1941～42年に、治安維持法違反として、全国で約300人の綴方教師が逮捕された。これを、生活綴方事件という。新潟県では、1941年11月、1942年2月、同年4月に、16人（25人説あり）が逮捕され、半年から1年間の、警察での拷問などの厳しい取り調べの後、教職から追放された。新潟師範学校附属国民学校訓導の遠藤稔は、1942年2月26日の午前4時に、自宅で「思想犯」として逮捕された。新潟師範学校の教員からも逮捕者が出た（新潟県教育百年史編さん委員会編『新潟県教育百年史 大正・昭和前期編』新潟県教育委員会、1973年、1116～1119頁）。

²⁵ 橋田邦彦：1882～1945年、医学専攻。東京帝国大学医学部教授として、第2次・第3次近衛文麿内閣、東条英機内閣において、文部大臣を務めた（1940年7月～1943年4月）。橋田による「科学する心」は、よく知られる。

²⁶ 師範学校の官立移管：1943年の師範学校令改正により、師範学校を、基本的に中等学校（中学校など）の卒業生が入学する本科3年制の専門学校（旧制）に昇格させて、県立から官立に移管させたこと。年限延長が実現したと同時に、中等学校が5年から4年に戦時短縮されたこともあり、当時としては実質的な変化に乏しかったとされている。

月に例の学徒出陣になることになりました²⁷。当時は1銭5厘^{りん}で兵隊に行くものだと思っていますから²⁸、そのまま待っていると、一兵卒で軍隊に入ることになります。そのため、みな、志願しました。私は、卒業後に、高等師範から軍隊に入りましたが、悲惨なものですよ。この官立移管のことは、しばらく研究がありませんでしたが、最近は進んでいるようです²⁹。

3. 東京高等師範学校

一 東京高等師範学校に進学されたときのことを、お聞かせ下さい。

昭和18(1943)年4月に、東京高等師範学校の文科第四部(地理歴史)に入学します。

このときに、新潟県の師範学校から東京高師(高等師範学校)に入学したのは、新潟師範学校からは私と、盟友の本間忍³⁰さんの二人です。高田師範学校からも数名おられたようです。筆記試験の細かいことはよく覚えていません。口頭試験は、じっくりやらされました。二人の面接官のうちのお一人は、後に指導教官になる、山崎宏³¹先生であったことを覚えています。

その前の年までは、倍率が17~18倍とか言われていましたが、自分のときは、そうでもなかったと思いました。筆記試験の他に、寮の周りを走らされたりもしました。

新潟師範学校を卒業した同級生は、小学校の教師になります。師範学校卒業生には、県内に、2年間は就職する義務がありました。そのため、東京高等師範学校に進学した私の履歴では、「昭和18(1943)年3月20日、新潟師範学校卒業」、「4月より新潟師範学校附属国民学校訓導³²〔休職〕」となっているようでした。つまり、東京高等師範学校(3年)・東京文理科大学(3年)・東京文理科大学研究科(5年)という11年間は、手続き上「休職」扱いであったことになります。

このような書類上の詳しいことは、後になって知りました。軍隊に入る前に、高等師範にいたときのものは、教師の免許状から剣道の道具、書籍や衣類のすべてを荷物

²⁷ 1943年3月卒業予定者は、官立移管に伴って、卒業が1年間延長されたが、戦時短縮により、1943年9月末に卒業となった。

²⁸ 1銭5厘で兵隊に行く：1銭5厘とは当時の葉書の切手代。戦時の軍隊への召集は、赤紙と呼ばれた召集令状で行なわれた。召集令状は、実際には郵送されるものではなかったが、召集令状受け取りのために役所への呼び出しをする場合に葉書が用いられたこともあり、一般的にはこのように言われていた。

²⁹ 戦時下の師範学校に関する研究状況の問題点については、逸見勝亮『師範学校制度史研究』(北海道大学図書刊行会、1991年)の「はしがき」で言及されている。

³⁰ 本間忍：倫理学専攻。

³¹ 山崎宏：1903~1993年、東洋史専攻。

³² 訓導：戦前の小学校の正教員は、訓導と称した。

として、新潟の実家へ送る途中、それが昭和20(1945)年3月10日の東京大空襲³³により、池袋(東京都豊島区)の操車場で焼失してしまったため、自分でも分からなくなっていました。

一 戦争中の東京高等師範学校での学生生活は、どのようなものでしたでしょうか。

昭和20(1945)年4月に、軍隊に入るまでの2年間は、東京高等師範学校にいましたが、ゆっくり勉強はできませんでした。

昭和18(1943)年は、それなりに授業もありました。地理は花井重次³⁴先生と武見芳二³⁵先生、西洋史は杉勇³⁶先生、東洋史は木村正雄³⁷先生、日本史は木代修一³⁸先生と家永三郎³⁹先生に教わりました。ただし、教科書については使用しなかったようです。

昭和19(1944)年頃には、あちら、こちらに動員されていました。深川(現・東京都江東区)で飛行機の部品を作ったり、蒲田の穴守神社(現・大田区)近くの工場寮に宿泊して、動員に参加したりしました。

当時の先生がたとしては、木村正雄先生については、後に他の人たちから、先生の論文の素晴らしさを聞きました。また、吉田寅⁴⁰さんがお話になっていたように⁴¹、家永三郎先生については、ぼそっ、ぼそっという先生のお話を、私たちも聞きました。

そのころ、私は、思想的には、うぶというか、子供でした。三井甲之⁴²や蓑田胸喜⁴³の思想は、一高⁴⁴や高師の文一⁴⁵、他の学校にも影響を与えました。私ども高師の文四⁴⁶でも、階段教室で盛んに討論などをやったこともありました。当時の教授の先生がたは、大変だったと思います。私が1年生のときの夏休みでした。このことを、よく覚えています。

昭和18(1943)年8月に、先生がたに連れられて、千葉県の海岸に、訓練に行きま

³³ 3月10日の東京大空襲：1945年3月10日未明における東京の下町を中心とした米軍による大規模な空襲。死者は10万人以上と言われる。

³⁴ 花井重次：1900～1981年、地理学専攻。

³⁵ 武見芳二：1897～1946年、地理学専攻。

³⁶ 杉勇：1904～1989年、古代オリエント史専攻。

³⁷ 木村正雄：1910～1975年、東洋史専攻。

³⁸ 木代修一：1898～1988年、日本史専攻。

³⁹ 家永三郎：1913～2002年、日本史専攻。

⁴⁰ 吉田寅：1926年生まれ、東洋史専攻。

⁴¹ 「インタビュー記録 歴史教育体験を聞く 吉田寅先生」『歴史教育史研究』第6号、2009年3月。

⁴² 三井甲之：1883～1953年、文学者・思想家。右翼活動で知られる。

⁴³ 蓑田胸喜：1894～1946年、右翼思想家。三井甲之に師事していた。

⁴⁴ 一高：第一高等学校。現在の東京大学教養学部(東京都目黒区)。

⁴⁵ 高師文一：東京高等師範学校文科第一部(修身公民)。

⁴⁶ 高師文四：東京高等師範学校文科第四部(地理歴史)。

した。あの当時は、戦争も厳しくなっており、このようなことは絶対に許されなかったのに、よく行ったものだと思います。私は、長く泳ぐことはできても、水泳の型などは、さっぱりできませんでした。このときの写真も、焼けてしまってありません。このほか、埼玉の秩父地質の臨検調査、木代修一先生の神奈川の鎌倉遺跡臨検調査や、山梨での冬の山中湖周辺の研究調査などが懐かしく思い出されます。

4. 入営と敗戦

— 東京高等師範学校に在学中に、軍隊に入られたと伺いましたが、その前後はどのような状況であったのでしょうか。

昭和19(1944)年の9月か、10月に、私は徴兵検査で、新潟の実家に帰ってきました。巻町近くの赤塚村の赤塚尋常高等小学校⁴⁷で、検査を受けました。退役少将が審査官でした。このときの試験で、ひとつ間違えたことは、今でも慙愧に堪えません(笑)。普通ならば、甲種合格ではなく、第一乙種らしいのですが、戦争中で基準が下がっていたらしく、詳しくは聞いていませんけれど、どうも甲種合格になったようです⁴⁸。30キロの重さの俵を担いで、廊下を走るという試験もありました。

そうして、私は、東京高等師範在学中の昭和20(1945)年4月に、第二期特別幹部甲種候補生として軍隊に入りました。これは1年間で幹部、つまり将校になるというものでした。一緒に高師に入学した本間忍さんも、同じ第二期生でした。入隊に当たり、私はいったん新潟県の実家に帰りまして、近所の八幡神社から歓呼の声に送られて、巻駅まで参りました。そこから、神奈川県相模大野(相模原市)に行きました。

入隊したのは、陸軍の通信隊でした。たしか9か月で見習士官になって、その後の3か月で通信隊の将校に任官になるというものでした。赴任する師団は、宇都宮の予定でした。訓練はしましたが、空襲がありましたし、しばらくして戦争は終わりました。

— 通信隊には、希望して行かれたのでしょうか。また、どういう仕事なのでしょうか。

陸軍とは考えていましたが、通信隊に行くようにということは、向こうで言われたものでした。いわゆるトン・ツー(モールス符号)です。暗号を扱います。無線通信と有線通信がありました。旗で信号していたのを、無線でのトン・ツーで行なうようになりました。ところが、私は、剣道で突き指をしていたため、あまり、うまく打てませんでした。実際に通信将校になっていたら、大変でしたね。

⁴⁷ 現在の新潟市立赤塚小学校(新潟市西区赤塚)。赤塚村は、現在は新潟市西区。

⁴⁸ 徴兵検査の結果は、甲種、第一乙種～第三乙種、丙種などに分けられて合格が出された。

指導教官は、東京外語⁴⁹を出た見習士官で、実際に教えたのは、新潟県新発田出身の曹長でした。それから、陸軍士官学校⁵⁰を出た三浦大尉という人がいました。他にも、逓信学校⁵¹出身の人もいました。私たちが入ったときには、昭和 19 (1944) 年に入った第一期の人たちが、まだいました。同期の人は 40 名くらいでした。関西大学 (大阪府吹田市) の出身者、それに青山師範、豊島師範、大泉師範⁵²の出身者がいました。先ほどお話ししたように、師範学校出身者は、官立移管になって、昭和 18 (1943) 年 10 月に徴兵猶予が停止された人たちで、自分と同年齢の人たちでした。

新潟師範学校の同級生は、私と同じく、みな、軍隊に入りましたが、その中でも、海軍の特攻隊⁵³に志願した者も、7 名いました。志願させられたというか、希望といっても、実際には、希望しなくてはならない雰囲気になっていました。偶然、7 名のうちの 2 名は残りましたが、5 名は亡くなりました。気の毒でした。みな、一緒に運動をした仲間でした。柔道部やテニス部のキャプテンをしたような、センスのある者ばかりです。高田師範学校からも何名か、いるはずですが、私たちのような航空隊に入らないのは、生きて帰りました。

— 敗戦のときは、どちらにいらしたのですか。

昭和 20 (1945) 年 8 月 15 日 (敗戦) は、相模大野で迎えました。マッカーサーが来るということで、私たちは、いち早く避難しました。調布の国領 (現・東京都調布市国領町) に糧秣廠^{りょうまっしょう}がありまして、そこに、徒歩かと記憶していますが、行きました。毛布や米の倉庫がありました。そのときに全員が、軍隊手帳^{りゆうまっしょう}などを焼かされました。8 月下旬に、除隊になって、毛布 2 枚と靴、米を何升かもらって、帰って来ました。

帰って来ましても、うちに多少の米はありましたが、働き手もない状態でしたし、悲惨なものでした。町の人はずっと大変だったでしょうけど。しばらく様子を見て、東京高師に復学しました。昭和 20 (1945) 年のいつであったのかは、正確には覚えて

⁴⁹ 東京外語：東京外国語学校などを経て、1944 年に東京外事専門学校となり、戦後は東京外国語大学となる (東京都府中市)。

⁵⁰ 陸軍士官学校：1945 年まで存在した、陸軍の将校を養成する機関。

⁵¹ 逓信学校：戦前において郵便、電信・電話、海事、鉄道、航空などを管轄した逓信省 (運輸通信省など) 所管の職員養成機関。通信官吏練習所、通信院官吏練習所、高等逓信講習所などと改称された。高度な教育を施したことで知られる。

⁵² 青山師範、豊島師範、大泉師範：東京にあった青山師範学校 (1943 年から東京第一師範学校男子部)、豊島師範学校 (東京第二師範学校)、大泉師範学校 (東京第三師範学校)。これらの 3 校に、東京青年師範学校等を加えて、戦後は、東京学芸大学となる (東京都小金井市)。

⁵³ 特攻隊：特別攻撃隊。大戦末期における主に航空機による、戦死を前提にした体当たり攻撃をする部隊。航空機による特攻隊は、1944 年 10 月から敗戦まで、陸軍・海軍ともに盛んに行ない、学徒出陣の若者を含め、多くの戦死者を出した。

⁵⁴ 下士官兵に支給された手帳で、「軍人勅諭」などが記載されていた。軍歴などを記入する箇所もあり、身分証明の役割も果たしていた。

いません。

戦争中のことは、いろいろなことが錯綜して、何とも言えない、忘れることのできない思い出です。

5. 東京文理科大学と研究科

— 復学後に、東京文理科大学に進学された頃のことをお聞かせ下さい。

東京高等師範学校の3年を修了した、昭和21(1946)年4月に、東京文理科大学文学部の東洋史に進学しました⁵⁵。日本史専攻ということは、あまり考えていませんでした。地理でも、歴史でも、できれば外国のことを勉強したい、あまり人のやらないことを勉強したいとは考えました。実際に教師になったら、何でも担当しなければならぬのですけど。

文理科大学は、一部を除いて空襲で焼けていました。学徒出陣のときに、たすきをかけた同級生と、校門の所で、一緒に写真を撮りました。ただし、この写真も先ほど言った荷物の中で焼けてしまい、手元にはありません。

指導教官は、山崎宏先生でした。自分は元朝史を研究することになります。人のやらないようなことを勉強したいという気持ちがありました。山崎先生は、仏教史がご専門でしたので、モンゴル史とは、あまり関係はありませんでした。

私が実際の指導をしていただいたのは、大学を卒業した頃からでしたが、小林高四郎⁵⁶先生でした。小林高四郎先生は、元朝秘史のご研究をされておりました⁵⁷。それから、清水泰次⁵⁸先生、小竹文夫⁵⁹先生にも教えていただきました。私たちは、琵琶湖の脇の安いホテルに泊まって、京都大学人文科学研究所(京都市左京区)に通ったりしました。私は、多くの先生がたにお世話になりましたことを、今なお感謝しています。

— 『史潮』(大塚史学会)に書かれた論文である「世祖と儒者 — 元朝成立の一面として —」⁶⁰が、小林先生の卒業論文になるのでしょうか。

あれが一番はじめに書いたものですが、今で言えば、修士課程の論文に相当するものです。昭和24(1949)年3月に、東京文理科大学を卒業して、研究科に入って、特別奨学研究生をしていました。研究科というのは、要するに今の大学院です。当時、

⁵⁵ 東京高等師範学校は4年制であったが、3年修了時に東京文理科大学を受験し、入学することが可能であった。東京文理科大学については、注4を参照。

⁵⁶ 小林高四郎：1905～1987年、モンゴル史専攻。

⁵⁷ 小林高四郎『元朝秘史の研究』(日本学術振興会、1954年)など。『元朝秘史』は、チンギス・ハンを中心としたモンゴル帝国の成立と発展を記述した13世紀の歴史書。

⁵⁸ 清水泰次：1890～1960年、東洋史(明代)専攻。

⁵⁹ 小竹文夫：1900～1962年、東洋史専攻。

⁶⁰ 小林新三「世祖と儒者 — 元朝成立の一面として —」『史潮』第47号、1952年。

東京大学では大学院と呼んでいましたが、一橋大学や東京工業大学を含めて、東京文理科大学では、大学院を研究科と呼んでいました。前期の2年が修士、後期の3年が博士の課程です。

「世祖と儒者」という論文は、わりと良くできた論文だと思います。歴史に現われる指導者たちは、さまざまな局面で頭が混乱するものですが、そのようなときに、風水思想とか、何かいろいろな知識を持った者たちが、思想的に指導者を助けて、参謀のような役割を果たしています。世祖に付いて行った儒者たちが、耶律楚材⁶¹を含めて、どのように結びついているのかは、とても興味深い題材です。日本に来た禅僧たちも仏教だけでなく、さまざまな思想で指導者たちを支えていたと、私は思います。そういう点で、今、手掛けている良寛の研究にもつながっています。

卒業論文では、チンギスカン帝国について書きました。これは捉え方に特色がある論文でした。大事に取ってありますが、最期に焼き捨てようと思っています(笑)。大部族は、3つの集団に分けて捉えました。発想としては、当時の若者制度がありました。

— 小林先生のご同期には、多賀秋五郎⁶²先生と野沢豊⁶³先生がいらっしゃいますが。

お二人には、とてもお世話になりました。野沢豊さんは、歴史学研究会の委員に、私を紹介してくれました。委員としては、昭和30～32(1955～1957)年の1期2年間、務めました。私は中世史ですが、自分が委員をしていた頃、中世史は少し面倒でした。古代や近代の研究は盛んだが、日本史を含めて、中世史研究には進展がない、中世の取り扱いをどうしたらよいか、という問題が、焦点になっていました。歴史学研究会の優秀な研究者たちとの交流は、とても勉強になりました⁶⁴。

その関係で、あちこちに書かせてもらったこともありました。『世界史講座Ⅰ 東アジア世界の形成⁶⁵』の第4章「東アジアの変動と蒙古帝国」を書いたのは、この頃のことです。この本は、監修者がいい先生でした。少しは売れたようです。ただ、どういふわけか、私の書いたところは、大変にミスプリントが多くなっています。原稿を書いたのは、東京教育大学附属高校で講師をする前であったと思います(後述)。

⁶¹ 耶律楚材：1190～1244年、遼の王族出身の契丹人。チンギス・ハンとオゴタイ・ハンに信任された人物として知られる。

⁶² 多賀秋五郎：1912～1990年、東洋史専攻。

⁶³ 野沢豊：1922年生まれ、東洋史専攻。

⁶⁴ 当時の歴史学研究会にかかわり、小林新三「歴史学の成果と課題Ⅶ 1955年歴史学年報 封建 東洋」(『歴史学研究』第196号、1956年6月)がある。

⁶⁵ 上原専祿・江口朴郎・尾鍋輝彦・山本達郎監修『世界史講座Ⅰ 東アジア世界の形成』東洋経済新報社、1955年。なお、「世界史講座」は全8巻であった。

6. 高校の講師として

— 東京文理科大学の研究科に在籍中に、講師として、いろいろな高校で教えてこられたと伺いましたが、その当時のことをお聞かせ下さい。

文理科大を出た後で、研究科に在籍しているときに、食べていけなかったこともあり、いろいろなところで、講師をしました。

昭和24(1949)年4月に、東京都立板橋高校の定時制⁶⁶で講師をしました。このときは、英語を担当させられました。もちろん私には、英語の免許はありません。英語の発音から、やりましたので、何とかなりました。それから、社会も持ちました。このときの板橋高校の定時制に、世界史はなかったと記憶しています。なんでも、やりました。その当時は、専修大学(東京都千代田区など)のドイツ文学の助教授も来て、英語を教えていました。東京外語大のドイツ文学を出た左翼の人も、昼間はロシア文学を研究するために、夜のアルバイトとして授業を持っていました。角帽を被って授業をしている人もいました。生徒の中には優秀な人もたくさんいました。学年2クラスだったと思います。ここは、1年で辞めることになりました。私の後には、東洋史専攻の後輩に当たる長瀬守⁶⁷さんが来ました。

昭和25(1950)年4月から、東京都立北野高校⁶⁸で講師をしました。週に2日開けての4日間の勤務でした。ただし、11か月しか、おりませんでした。ここでは、日本史の授業を持ちました。世界史は別な人が持っていました。日本史の教科書は使いましたが、何を使ったのかは、覚えていません。世界史で使っていた教科書は、三上次男の『世界史 東洋史編⁶⁹』とかであったと記憶しています。これは、難しい本でしたね。

その後は、渋谷区しょうとうの松濤中学校とかで、非常勤講師をしていました。社会科を担当しました。よくできた生徒たちでした。練馬区しんまの中学校にも行きました。使った教科書などは、今では覚えていません。

— この時期に、小林先生が関わられた世界史の教科書や参考書について、お聞かせ下さい。

私は、この頃から、酒井忠夫⁷⁰先生の教科書や参考書にずいぶんと関わりました。績文堂の『世界史研究⁷¹』が、一番はじめに出来たもので、駿台予備校⁷²の先生が、と

⁶⁶ 東京都立板橋高校定時制：現・東京都立大山高校定時制（東京都板橋区）。

⁶⁷ 長瀬守：1923年生まれ、東洋史専攻。

⁶⁸ 東京都立北野高校：志村高校との統合により、現在は東京都立板橋有徳高校（東京都板橋区）。

⁶⁹ 三上次男『世界史 東洋史編（学生版）』中教出版社、1950年。

⁷⁰ 酒井忠夫：1912～2010年、東洋史専攻。

⁷¹ 酒井忠夫『世界史研究』績文堂出版、1953年12月初版、1955年4月改訂版。

てもいい参考書であると、ほめていたと聞きました。当時は、東大一点張りでしたし、このような本が出ていなかった時期でもありました。私も、専門に関わる部分の執筆に参加して書いています。

— 昭和 29 (1954) 年 3 月に、研究科を修了されて、すぐに就職されたのでしょうか。

研究科を 3 月に修了した後の、昭和 29 (1954) 年 4 月に、東京教育大学附属高校⁷³で、世界史の講師をしました。板橋高校にも行っていました。附属高校では、すぐ隣にある、お茶の水女子大学（東京都文京区）の学生たちが、私の授業を見に来たのを覚えています。世界史の授業では、好きなことをしゃべっていました。その年の 8 月に推薦されて、都立高校の専任の教諭として就職することになります。要するに、講師をしていないで、きちんと就職しなさい、ということであったと思います。私にとっては、ある意味で迷惑でした。私の後には、また、長瀬守さんが入ります。

そういうわけで、昭和 29 (1954) 年 9 月に、東京都立墨田工業高校（東京都江東区）の教諭になりました。

7. 東京都立高校の教諭として

— 昭和 31 (1956) 年の東京教育大学の講義一覧に「小林新三 元朝史研究」とありますが、これは都立高校にいらしたときでしょうか。

はい、1 年間、非常勤として講義をしました。墨田工業高校にいたときになります。都立高校の教員が、国立大学の講師をするというのは、今では難しいようですが、あの時分は、研究日⁷⁴もありましたし、公然とできました。教授法の研究という形で行っていましたが、何の問題にもなりません。ですから、今の先生は、気の毒です。とても、いい勉強になりました。

このときの講義には、真面目で、いい学生が来ていました。小木新造⁷⁵さんもいました。田中通彦⁷⁶さんや海老澤哲雄⁷⁷さん、金井徳幸⁷⁸さん、それに、その後に埼玉県で活躍する荒井桂⁷⁹さんたちが受講していました。優秀な人の多いクラスでした。

⁷² 駿台予備校：東京都千代田区に中心を置く大学受験予備校。当時は駿台高等予備校。

⁷³ 東京教育大学附属高校：現在の筑波大学附属高校（東京都文京区）。

⁷⁴ 研究日：東京都立高校の教員は、週に 1 日、自宅や図書館等で自主的に研修することが認められていた。研究日または研修日という。

⁷⁵ 小木新造：1924～2007 年、日本文化史専攻。

⁷⁶ 田中通彦：1935 年生まれ、東洋史専攻。

⁷⁷ 海老澤哲雄：1936 年生まれ、東洋史（元・モンゴル史）専攻。

⁷⁸ 金井徳幸：1933 年生まれ、東洋史専攻。

⁷⁹ 荒井桂：1935 年生まれ、東洋史専攻。

— その後に、東京都立竹早高校に異動されたのでしょうか。

昭和 32 (1957) 年 4 月から、竹早高校 (東京都文京区) に移ります。昭和 44 (1969) 年まで 12 年、勤めました。石川さんという東京帝国大学出身の日本史教師の代わりに、竹早高校に行きました。そのため、世界史は他に人がいましたので、私は、竹早高校では、日本史を教えていました。このころ、伊瀬仙太郎⁸⁰先生から、人名表記や世界史教育などの指導を頂きました⁸¹。

世界史には、板垣雄三⁸²さんがいました。板垣さんとは、竹早高校で 5 年間、一緒でした。板垣さんは、イスラム研究の第一人者になる人です。

竹早高校では、高校の学園紛争⁸³が盛んなときにあたり、大変なこともありました。

— 小林先生が「元朝における銀の賜与について」を書かれた『元史刑法志の研究訳註⁸⁴』の「序」には、昭和 33 (1958) 年春から昭和 35 (1960) 年 12 月まで毎週金曜日に研究会を行なったと書かれています。竹早高校にいらした時期だと思いますが、小林先生はこれに参加されていたのですか。

また、「序」には、小林高四郎先生のお名前が出てきますが、この研究会は、小林高四郎先生が中心だったのでしょうか。

そうです、私は、この研究会に参加していたようです。この研究会は小林高四郎先生を含めて、「通制条格訳註」への準備をするための輪読会であったと記憶しています⁸⁵。「元朝における銀の賜与について」の論文は、この研究会のときの研究というわけではありません。しかし、大変に参考になりました。

小林高四郎先生は、大変にご立派な方で、自分で惜しみなく史料を提供しながら、我々がやったような指導をして下さいました。あのようなことは、なかなか真似ができないですね。新潟県ご出身で、慶応大学を出られた先生でした。戦前に、北京に留学されて、イスタンブールで外交官をされたこともありました。もともとは中国文学の専門でいらしたと思いました。文理科大の講師としてもお出でになっていました。

⁸⁰ 伊瀬仙太郎：1913～1999 年、東洋史専攻。

⁸¹ 日本史の人名表記について、小林新三・渡辺忠胤を責任編集者とした総合歴史教育研究所編集発行『日本史教科書人名一覧表』(1965 年) が作成されている。また、根本茂夫を責任編集者とした同編集発行の『世界史教科書人名一覧表』(1966 年) も作成された。表記法に関して、小林氏は、後に、小林新三「世界史教育上における表記法の問題—とくに地名・人名の表記について—」(『総合歴史教育』第 7 号、1971 年) を執筆している。

⁸² 板垣雄三：1931 年生まれ、イスラム史専攻。

⁸³ 学園紛争：大学では 1967～68 年を中心に、高校では 1968～69 年に、学生・生徒による政治的・社会的な運動が急激に盛り上がった。

⁸⁴ 小竹文夫・岡本敬二編著『元史刑法志の研究訳註』教育書籍、1962 年。

⁸⁵ 小林新三氏は、『通制条格の研究訳註』(第 1 冊：小林高四郎・岡本敬二編、中国刑法史研究会発行、1965 年 [国書刊行会、1975 年第 2 刷]。第 2 冊：岡本敬二編、国書刊行会、1975 年。第 3 冊：岡本敬二編、国書刊行会、1976 年) に参加している。『元典章』『通制条格』は、元代の法律書。

私たちは、よく、鎌倉まで、小林高四郎先生のところに伺いました。小林高四郎先生は、横浜国立大学（神奈川県横浜市）にいらしたので、その寮に行って、博士論文のお仕事のお手伝いをしたようなこともありました。とても、ざっくばらんなお人柄の先生でした。私は、個人的にも大変にお世話になりました。

一 竹早高校では日本史を担当されたとのことですが、当時、手がけられた、世界史の教科書や参考書についてお聞かせ下さい。

教科書では、自由書房の『高校世界史⁸⁶』に関係しました。小竹文夫先生が執筆されています。教科書に、名前は出ていませんが、私もどこかを書いたと記憶しています。この教科書の指導資料⁸⁷も書きました。こちらのほうには、長瀬守さんとともに、私の名前も掲載されています。

それから、酒井忠夫先生が、江口朴郎⁸⁸先生とともに著者となった秀英出版の世界史教科書⁸⁹にも関係しました。この教科書に対応した年表⁹⁰も作りました。元朝の前後の時代の部分は私が書いたものです。

また、酒井先生の世界史問題集⁹¹の編集にも、笠間達男⁹²さんと協力しました。笠間達男さんは、後輩に当る人ですが、文が立つ、力のある人物です。酒井先生と私の共著として、出版した問題集⁹³もありました。この本は、完成したときに色刷りになっていて、著者である私自身が、驚いたことを覚えています。この問題集は、酒井先生との共著の形ですが、酒井先生が直接書くことはありえません。たしか、長瀬守さんが手伝って書かれたものだったと思います。

長瀬さんとは、一緒に世界史地図⁹⁴も作りました。この地図は、作図やその他で、私自身が相当に書きました。長瀬さんは、非常に文才のある人です。私の後輩に当る長瀬さんには、いろいろな場面で頼られましたが、長瀬さんの尽力で、ここで紹介し

⁸⁶ 貝塚茂樹・小竹文夫・増田四郎『高校世界史』自由書房、1961年。翌年に『高校世界史 改訂版』が発行されている。

⁸⁷ 貝塚茂樹・小竹文夫・増田四郎監修『高校世界史 教師用 指導資料』自由書房、年欠（1961年）。

⁸⁸ 江口朴郎：1911～1989年、西洋史専攻。

⁸⁹ 酒井忠夫による秀英出版の世界史教科書は、酒井忠夫・高橋幸八郎『世界史B』（1964年）、同『改訂世界史B』（1967年）、同『三訂世界史B』（1970年）がある。一方で、秀英出版は1957年以来、江口朴郎の世界史教科書を発行しており、1964年以後、江口は世界史Aの執筆者となった。世界史のAとBの区分を廃止した後は、江口朴郎・岡本敬二・酒井忠夫ほか7名として『世界史』を1973年と1976年に発行している。

⁹⁰ 酒井忠夫・高橋幸八郎『世界史年表』秀英出版、1962年。

⁹¹ 酒井忠夫編著、編修協力代表者小林新三・笠間達男『ユニット問題集 世界史』評論社、1962年。

⁹² 笠間達男：1927年生まれ、東洋史専攻。

⁹³ 酒井忠夫・小林新三共著『世界史 高校用一整理と問題研究12』文理書院、1967年3月初版、4月再版発行。

⁹⁴ 岡本敬二監修、小林新三・長瀬守・谷畑三郎『新編世界史地図』東京学習社、1970年1月初版印刷、1976年2月改訂再版発行。

たような本が出版されたおかげで、いくつもの東洋史の専門書が出ています。

いろいろな、おかたと仕事をしてきましたが、みな、とても個性のある人たちでした。特に、酒井先生のような昔の先生がたは、我々と違って、じつに芯の強いかがたでした。

それから、竹早高校に勤務中のことですが、同校同窓会館（^{たかやから}篁館）において、職場に従事しながら、1か月に1回、日曜日に東洋史研究会を持ちました。それぞれの研究テーマを設定して、発表と討論をする形式を採りました。小笠原正治⁹⁵氏をはじめ、吉田寅、長瀬守、千葉^{ひろし}⁹⁶、中村充一⁹⁷、安田修一⁹⁸、有井智徳⁹⁹の各氏と私、時に阿部肇一¹⁰⁰氏も参加して、大変に勉強になりました。

— その後に移られた千歳高校は、どのような学校でしたでしょうか。

昭和44（1969）年4月に、東京都立千歳高校¹⁰¹に異動しました。昭和54（1979）年まで勤めました。

異動したのは、高校の学園紛争の時期（1968～1969年ごろ）の後でしたが、千歳高校は思いのほか、動揺のなかった学校でした。千歳高校の先生がたは、時間をかけて、細心の注意をはらっていました。教え方を工夫したり、方面別旅行を実施し、生徒作成の文集などを出したり、生徒の進む方向を、何かの形で向けてあげる努力をしていました。

世界史を教えるようになったのは、千歳高校に行ってからになります。自分の専門の世界史ということもあり、気持ちよく授業ができました。このころは、伸び伸びと、割合にいい授業ができたと思います。文化圏学習が盛んな頃でした。生徒たちも、よく付いて来てくれました。生徒指導は、教科を問わず大変でしたが、今でも手紙をやり取りする生徒もいます。生徒から慕われるというのは、教師冥利ですね。教師として、やりがいのある学校でした。

いくつかの学校を経験して、思うことは、それぞれの学校に特色があって、それに合わせた指導方法なり、教材研究なりをしていく必要があるということです。これは、いつの時代も同じでしょう。

— 田中通彦先生が、小林新三先生と一緒に、東京都の現代化委員会で仕事をしたと

95 小笠原正治：東洋史専攻。

96 千葉^{ひろし}：東洋史専攻。

97 中村充一：1929年生まれ、東洋史専攻。

98 安田修一：東洋史専攻。

99 有井智徳：朝鮮史専攻。

100 阿部肇一：1928年生まれ、中国仏教史専攻。

101 東京都立千歳高校：明正高校と統合して、現在は東京都立芦花高校（東京都世田谷区）。

お話しされていましたが、どのような委員会なのでしょう。

正式には、東京都公立学校教育課程編成作成委員会と言います。千歳高校にいたときの昭和46～47（1971～1972）年度に、参加しました。いろいろな仕事を長く一緒にしてきた、鈴木健一¹⁰²さんからの依頼であったかと思います。教育課程を現代化する委員会ということです。戸山高校（東京都新宿区）の校長が委員長でした。私は、総務編をやりました。文部省が出している教育課程を、都にあわせて作成するものです。各県で、このようなものがありました。世界史というより、社会科として参加しました。

— 「元代における庶民教化¹⁰³」のご研究は、千歳高校にいらしたときのものでしょうか。

千歳高校では、学問研究のほうは、疎かになってしまいましたが、元代における庶民教育として、社学¹⁰⁴の研究を行ないました。この論文は、私なりの考えを、史料をもとにまとめたものです。『元典章』などを共同訳註したこともあり、史料は豊富でしたので、このような研究ができました。後に、新潟に帰ってきて、社学を、今までのものとは違った角度から見たらどうなるか、日本における明治以前の教学組織との関係はどうなのか、など調べようとは思いましたが、残念ながら、できていません。

— 『都歴研紀要』を見ますと、1970年代に中国やソ連への旅行に参加されていますが、どのような旅行であったのか、お聞かせ下さい。

都歴研（東京都歴史教育研究会）に関わって、韓国をはじめ、中国やモンゴル、ソ連に行きました。

昭和48（1973）年3月の「韓国歴史の旅」では、慶州の武烈王陵¹⁰⁵や慶州博物館、ソウルの国立博物館などを見学しました。昭和50（1975）年8月には、第1次日本教職員友好訪華団の一員として、北京・西安・洛陽・上海を訪問しました¹⁰⁶。北京の人民大会堂の内部見学は貴重な体験で、強く印象に残っています。この時期に中国に行ったのは、比較的早いものでした。

その後、商業ベースに乗せることを考えた、近畿日本ツーリストが後ろにつきまし

¹⁰² 鈴木健一：1929年生まれ、東洋教育史専攻。

¹⁰³ 小林新三「元代における庶民教化」（多賀秋五郎編著『中世アジア教育史研究』国書刊行会、1980年）。また、小林新三「元代の教育—とくに民衆教化について—」（『東洋教育史研究』第1集、1977年）がある。

¹⁰⁴ 社学：元では、農村を中心に約50戸で「社」を組織させ、勸農と教化を実施させた。それぞれの社が設置した学校を「社学」という。

¹⁰⁵ 武烈王：7世紀後半の新羅王。三国統一の基礎を築いた。

¹⁰⁶ 小林新三・萱原昌二「中国の旅」（『都歴研紀要』第12号、1976年3月）。

た。東洋史が私の専門ですから、いわば講師のような形で参加したようでした。その第1回として、昭和52(1977)年8月に中国に行きました¹⁰⁷。第2回として、昭和53(1978)年の春に中国に行き、第3回として、同年8月に中国やモンゴル、ソ連に行きました¹⁰⁸。第3回するとき、帰りは、イルクーツクから新潟に飛行機が来るはずでしたが、だめになりまして、北京経由になったのも、いい思い出です。

8. 秀明学園中学高校

— その後、移られた秀明学園について、お聞かせ下さい。

定年になる前に、都立高校を完全に退職しまして、創設の2年目の学校法人秀明学園の秀明中学に教頭待遇で行きました。東京高師の英文を出た人からのお誘いがありました。それまで、いくつかのお誘いを断ってきていました。

秀明学園秀明中学・高校は、全国から生徒が集まる、埼玉県川越市にある全寮制の中高一貫の私立学校です。自宅と別に、住宅があって泊まっていました。中学・高校の副校長、そして校長を務めました。その後に入ってくる教員たちには、教案の書き方から、通信簿の付け方から、全部指導しました。6年目の昭和60(1985)年春に、硬式野球部が甲子園に行きました。このときに、全国的に学校の名前が出ました。

担当する授業はなくなりましたが、先生の休みが出たときに教室に行って、モンゴルのことを話したり、スライドを用意して見せたりしたことがありました。生徒を、歯学部や医学部の大学にずいぶん合格させていました。その点は、今でも感謝されています。

— 故郷の新潟県巻町に戻られたのは、その後のことになりますか。

昭和62(1987)年に悪性の癌^{がん}をやりました。そのころ、現職の校長は辞めて、秀明学園の関連する3つの学校の総務主幹と秀明学園の理事をしていました¹⁰⁹。その後も体を悪くしまして、これも辞めました。書類の上では、平成3(1991)年に正式にすべて辞めたことになっていますが、このときには、すでに新潟に戻っていました。

¹⁰⁷ 小林新三「歴史がもつ重みを認識」(東京都歴史教育研究会第一次友好訪華団編『碑林 — 都歴研訪華団の記録 —』東京都歴史教育研究会、1978年3月)。

¹⁰⁸ 小林新三「(北京—ウランバートル—バイカル湖—北京)の旅」(『都歴研紀要』第15号、1978年)。1977年の2回にわたる旅行の記録には、東京都歴史教育研究会第2次友好訪華団編『瀟江 — 都歴研訪華団の記録 —』(東京都歴史教育研究会、1979年2月)がある。

¹⁰⁹ 秀明学園は、秀明中学・高校(埼玉県川越市)、秀明英光高校(埼玉県上尾市)、秀明八千代中学・高校(千葉県八千代市)の3校と秀明大学(千葉県八千代市)などを運営している。

9. 巻での郷土史研究

一 巻史学会の会長そして巻郷土資料館友の会の会長をされていたと伺いましたが、新潟県巻町で取り組まれてきた郷土史研究について、お聞かせ下さい。

中学2年までしか、巻にいなかったこともあり、郷土のことは何も知りませんでした。こちらに戻ってきてから勉強しました。同級生に声を掛けられて、巻町の社会教育委員、文化財や郷土資料館¹¹⁰の委員などを務める中で、勉強しましたものです。

巻史学会の会員は20名前後です。同じ頃に、会長を務めた巻郷土資料館友の会の正式な会員は100名前後ですが、機関誌の『まきの木』は、250部ほど刷っています。これは、県下でも有数です。巻郷土資料館の運営委員は、平成3(1991)年くらいからです。巻史学会の会長は、平成15(2003)年から務めました。両会長とも、今年(平成22[2010]年)3月で、引退しました。地元のかたが参加していますが、年配者が多いので、継続することが課題ですね。

私が手掛けた良寛¹¹¹の研究は、良寛の史料を丹念に読み^{しら}へることに努めました¹¹²。3月にまとめた『潟南残照¹¹³』に掲載したのは、良寛に関連した解良家・柄澤家・樋口家に、永井家を加えて新しい関係図を作成したものです。

また、巻菱湖¹¹⁴についても、手掛けました。巻菱湖は、巻出身の書家で、幕末三筆の一人です。巻郷土資料館に所蔵している巻菱湖の書画を、私は、できるだけ紹介することに努めました¹¹⁵。

一 長年にわたって、歴史や歴史教育の研究に携わられていらした小林先生のお考えになる、一番大切なことは、どのようなことでしょうか。

どのようなことでも、言えることですが、そのとき、そのときによって、心掛けたかたが変わってくるのは、事実ですね。自分が相手の気持ちになって批判したり、時の

¹¹⁰ 巻郷土資料館(新潟県新潟市西蒲区巻甲)。

¹¹¹ 良寛：1758～1831年。江戸後期の越後国出雲崎出身の禅僧で、歌人、漢詩人、書家。諸国行脚の後、1797年に故郷に戻って隠棲し、多くの和歌・漢詩・書そして逸話を残した。

¹¹² 小林新三「良寛書籍展に寄せて」(『新潟日報』1997年10月7日)。小林新三「巻町郷土資料館蔵樋口家写本「良寛禅師詩集」について」(『まきの木』第69号、1998年10月)など。

¹¹³ 小林新三著作発行『潟南残照—思い出のしおり—』2010年3月。

¹¹⁴ 巻菱湖：1777～1843年、儒家、書家。その書は、菱湖流として明治以降も広く流行した。市河米庵(1779～1858年)、貫名海屋(1778～1863年)とともに、「幕末の三筆」と呼ばれる。

¹¹⁵ 小林新三「巻郷土資料館蔵「巻菱湖臨書米芾天馬賦」について小考」(『新潟県文人研究』第10号、2007年)、「巻菱湖と研究動向」(『まきの木』第74号、2001年)、「巻郷土資料館蔵巻菱湖書「六曲一双屏風(六尺)」の「釈文」修正について」(『まきの木』第82号、2005年)などがある。また、『まきの木』には「巻の名流—墨跡と絵画—」として、1999年(第71号)以来、巻菱湖を中心に書画を紹介している。

動きに応じて、自分なりの対応を考えたりしていかないといけない、と思います。最後まで持ち続けるのではなく、自分のことに固執することなく、参考にしながら、現在に、どう生かしたら良いのか。また、生かしていくべきか、生かすにはどういう方法があるのか。そういうものを、我々も常に考えていかななくては、ならないでしょう。

簡単に言えば、温故知新ですけど、一言で温故知新と言っても、時代の流れ、時代の動きは違うのですから、似て非なるものです。変化と変容は違います。これを教育者であるなしを問わず、どういうものが必要なのか、どういう手段や方法をとるべきかを考えること、そういうことが必要だと思います。

理（ことわり）と情（なさけ）に流されながら、生きた人生ですが、人間である以上は、意地と見栄も否定しません。現在の私にとっては、自分の年齢を恐れず、自分のできる範囲を乗り越えていく努力をしていくしかありません。荘子の言葉に、「吾が生や涯りあり、而して知や涯りなし¹¹⁶」というものがあります。年齢には、制限があるけれども、精神や気持ちにおいては、限りがないことを示しています。これが、私の座右の銘です。

— 本日は、長い時間、お話をお聞かせ下さいまして、ありがとうございました。

後記

インタビューの願いを快くお引き受け下さり、多くの貴重なお話を伺うことができた。原稿をまとめる段階でも、幾度もの問い合わせに、その都度、丁寧なお答えを下さるとともに、多くの得がたい資料をお送りいただいた。それでも、高校現場で歴史教師として勤められる傍ら、小林先生が取り組まれてきた元朝史研究について、聞き手の不勉強により十分にまとめることができなかった。また、新潟県巻での郷土史研究についても、まだまだ伺うべきことがあったはずと反省している。歴史に対する教育と研究の追究を、東アジアから郷土の新潟県巻までを対象に、戦争後から現在に至るまで、精力的に継続されてきた小林先生の探究者としての幅の広さと奥の深さに感服するばかりであった。

最後に、お忙しい中、全面的なご協力を賜った小林新三先生に心から御礼を申し上げます。

（注記に関して、ご協力とご教示を賜りました皆様に感謝申し上げます。また、様々な文献やホームページの情報も利用させて頂きましたことを申し添えます。）

（文責：茨木智志）

116 「吾生也有涯、而知也無涯」：『莊子』「内篇 養生主第三」。